

令和4年度 第2回島根県社会教育委員の会議

日時：令和5年3月8日（水）

13：00～15：30

場所：サンラポーむらくも（八雲の間）

○藤原GL それでは、ただいまより令和4年度第2回島根県社会教育委員の会議を始めます。

本日の会議は、島根県情報公開条例第34条に基づき公開としています。

教育長の挨拶に先立ちまして、委員の異動がありましたので、御報告させていただきます。

邑南町の前教育委員会教育長、土居達也様が御退任となりました。後任としまして、市町村教育長会から推薦をいただきました邑南町教育委員会教育長、大橋覚様を1月24日付で委嘱させていただいたところでございます。本日、当初は御出席の御予定でしたが、議会对応のため急遽御欠席となりましたので、ここで紹介させていただきます。

また、委員の山崎瑞穂様におかれましては、本日オンラインでの御出席となります。御都合により14時15分頃には御退席される予定でございます。

それでは、開会に当たりまして、島根県教育委員会教育長、野津建二が御挨拶いたします。

○野津教育長 皆さん、こんにちは。教育長の野津でございます。本日は、皆様、年度末の御多用なときにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

お手元に月刊「社会教育」1月号、2月号、お配りさせていただいております。月刊「社会教育」の方から、単独県特集を始めるにあたり、島根県から取り組みたいというお話がありました。1月号に特集するのでということで私もインタビューを受けましたが、ついつい2時間ぐらい話してしまいましたら、1月号に収まり切らずに2月号まで私だけ飛び出てしまいました。

思い起こしますと、平成23年に、私が社会教育課長だったときに、月刊「公民館」が初めて単独で県の特集をするというときも島根県が選ばれました。私もそのときに、当時の福間県公連会長と教育長と3人で、座談会に参加したことを思い出します。社会教育を代表する国内の基幹的な雑誌が、今まで2県一緒に載せていたところを、単独で載せるといふ思い切ったことを始めるに当たって、ともに島根県を選んだということが、現代の日本の社会教育における島根県の役割・立場・存在感を象徴しているのではないかと考えております。

私の話は、そんなに珍しい話をしたわけではなく、都会の人に対してなぜ島根という田舎で社会教育に力を入れているのだろうという疑問に答える形で話しました。詳しくは記事をゆっくり読んでいただきたいと思います。やはり人がどう生きるのか、どう暮らす

のかというところに、行政とか大人とか地域社会とかがどう関わるのか、どういうウエイトを占めるのかということがポイントです。島根の在り方として、住民の方が人間らしく生きるために社会教育のようなアプローチがやはり必要だということを述べました。社会教育に携わる皆さんの日々の活動が、若い人、高齢の方、毎日一生懸命働いておられる方、そういったあらゆる年齢層の支えとなっており、生きがいや人間らしい暮らしをできるような素材を提供し続けています。これが島根県で社会教育が必要とされている根本の理由だろうという発想が私にはあります。

コミュニケーションという、言葉を話す・聞くという本能が人間にはあります。その本能を満たすために人は移動し、新しい知識も得ていきます。こういう基本的な行動が、経済的な満足では代替することができない生きる原動力となっています。島根県にはたくさん娯楽施設があるわけでもありませんし、経済的に裕福でもありません。しかし、コミュニケーションという人間の本能を満たす一番贅沢な環境が島根県にはあると考えています。

そう考えると、少子化や過疎化という問題は、本能を満たすという意味で非常に環境が悪くなっているといえます。人がいなくなり、普通に隣を向いて話せなくなっています。少子化は、次の世代に何かを伝えたいのに子どもがいないという「子どもの過疎化」にもつながっています。

そういったところでやはり人間として生きていくためには、移動して人と関わり、話したい、伝えたいという本能を満たしていく必要があります。この意欲が島根のエネルギーとなっています。悲しいことですが、過疎化、少子化であることが、社会のエネルギーとなっているともいえます。

これが実は、島根の地域力の一つの正体だというふうに思っています。全国的にあと20年するとどこも同じような状況になってきます。我々は20年先行してこういう状況を経験しており、なおかつそこでしっかり生き抜き対応しています。社会教育としてシステムをしっかり提供できているので、そういうことがうまくいっていると感じています。

そのような思いを2時間ほど話しましたが、雑誌の編集長や放送大学の先生、社会教育を学んでいる大学院生など都会の人が聞くと「なるほど。」と言われます。島根のような環境で育っておられませんか、社会教育がそんなに必要とされていない社会で生きておられますから、意識せずに生活しておられるのだろうと感じました。しかし、先ほど言いましたように、あと20年もすれば日本全体で意識するようになると思います。そのときに、「ああ、島根ってやっぱりすごいね。島根に学ぼう。」となると私は思っています。そのためには、やはり我々はトップランナーであり続けたいです。住民の方、あるいは自分自身一人一人が、輝いて生きる、満足して生きることができるよう、我々教育委員会も、こういったことを基に話し合いをして、しっかり磨き上げていきたいと思います。また、こうやって活動されている皆様方のお知恵も拝借しながら、ますます島根の社会教育が発展するようにこれからも努力してまいりたいと思っておりますので、どうぞ皆様、御

理解と引き続きの御協力をよろしくお願ひいたします。本日はありがとうございました。

○藤原GL 野津教育長は他の公務がありますので、ここで退席させていただきます。

初めに、資料の確認をさせていただきます。本日配付しました資料は、事前に送付いたしました会議資料と、机の上に置かせていただきましたクリップ留めの資料が2種類、また、先ほど挨拶の中にもございました月刊「社会教育」の1月号、2月号と、「かわもと「あそラボ」」のリーフレットを配付いたしております。もし不足等ございましたら、お知らせいただければすぐにお持ちします。よろしいでしょうか。

それでは、島根県社会教育委員の組織、運営等に関する要綱第4条により、会長が議長となりますので、これからの議事進行は有馬会長にお願いいたします。

有馬会長、よろしくお願ひいたします。

○有馬会長 それでは、進行をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

今、教育長さんの御挨拶を聞きながら、島根の社会教育という立派なフィールドを、私たちはさらに発展、進化させるという、そういう役割も担っていると思った次第ですが、今日もそういったことを目指して、皆さんと話し合いできる機会になればと思っております。

最初に、令和5年度の社会教育関係団体への補助金の交付について御審議をお願いいたしますが、御承知のように、補助金を交付する場合には審議が必要となるということです。よろしくお願ひします。

では、事務局からお願ひします。

○福本SL 先ほど有馬会長の方からお話をいただきましたけれども、島根県から団体に補助金を交付するときには社会教育委員の承認を得るということで、関連法令等、資料の3ページのところに載せさせていただいております。

補助金の考え方ですけれども、団体が全国大会、中国ブロック大会等の大規模な事業を実施する際、事業費補助を検討するという事になっております。ちなみに、第1回のところでもお伝えさせていただきましたけれども、令和4年度につきましては、日本ボーイスカウト島根連盟に補助する予定でしたが、大会が中止になったため、補助せずということになっております。

次年度、令和5年度につきましては、第45回中国・四国地区社会教育研究大会島根大会が島根県民会館を会場に計画をされております。資料の5ページ、6ページを御覧いただきますと、若干、案の段階で埋まってないところもございますけれども、11月16日、17日の2日間で大会が計画されているところでございます。

資料に戻っていただきまして、4ページ、この研究会に対してこのような予算で計画をしておられまして、県からは55万円の補助を御提案をさせていただきますので、御審議をお願いいたします。

○有馬会長 今、説明がございました。何か御質問がございますか。

補助金の交付を御承認いただける委員の皆さんは、挙手をお願いしたいと思います。

〔賛成者挙手〕

○有馬会長 ありがとうございます。

それでは、御承認いただいたということを確認いたしましたので、補助金を交付していただくことにいたします。

それでは、次に行かせていただきますが、報告や説明事項に移らせていただきます。

1つ目は、社会教育課の令和5年度の主要事業についてですが、私たち社会教育委員として、社会教育課が行っております事業についてはよく理解しているというか、よく分かっているということが委員として大事ですが、その説明をいただく時間が前回も十分ではありませんでしたし、私達も自学、自習をしなければいけないところもあるように思います。今日も短時間ですけれども、重要な部分について若干の説明をお願いしようと思っております。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○福本SL それでは、失礼いたします。

資料7ページから11ページまでのところで、令和5年度事業の資料を載せております。ここでは令和5年度の新規事業についてのみ御説明をさせていただきます。

○高橋 資料は10ページを御覧ください。令和5年度新規事業ですけれども、「学びのサイクル」による人づくり促進事業について御説明いたします。

県では、地域住民を巻き込みながら地域の課題解決を図る取組、また、地域を担う人づくりに取り組む公民館等を、これまで様々な事業によって支援してまいりました。その事業に取り組んでこられた公民館等を中心に、人づくりのスキルやノウハウが徐々に蓄積されてきているところです。しかしながら、毎年県で実施している公民館等実態調査においては、公民館等が把握している地域課題として近年トップになっているのが次世代の人材育成とリーダー育成でありまして、令和4年度の調査では、実に約6割の公民館等が地域課題であると感じていらっしゃいます。これまで様々なアプローチをしてきてはいるものの、なかなかそう簡単に解決できる課題ではないということが言えると思います。このことから、次世代の人材育成はもはや公民館等だけでなく、地域全体で意識を持って取り組んでいくことが必要ではないかと考えます。

そこで、令和5年度から新たに取り組むのが「学びのサイクル」による人づくり促進事業です。この事業は、学びのサイクルを生み出す活動を地域団体と一緒に実施する公民館等に対して、市町村が支援することによって地域住民の人づくりを進めていくということを目的としています。

ここで言う学びのサイクルとは、資料では点線の枠の中に示しておりますが、学習や実践活動をきっかけに地域住民が気づきや達成感、向上心を得て次の学びに向かい、繰り返すことによって成長していく過程のことです。イメージとしますと、右側のところにある

矢印の絵ですとか、下のところにもありますけれども、気づき、達成感、欲求、向上心がぐるぐる回りながら、その中で人が成長していくというようなイメージです。

人づくりのスキルやノウハウを蓄積した公民館等と様々な思いやアイデアを持っている地域団体等が連携して、地域住民のための学習や実践活動を考え実施していく、そうすることによって、地域住民に学習や実践をきっかけに学びのサイクルが生み出されることによって当事者意識が高まり、将来的には地域課題解決の取組などに自発的に関わり始める人材育成につなげていただきたいと思います。

こうした公民館等の取組に対しまして、市町村には支援ですとか助言をしていただいたり、例えば、計画づくりの段階から、地域の数年後のイメージを持ちながら一緒に計画をつくっていったりするの、人づくりを進めるプロセス、社会教育の流儀でもあります、集って、楽しんで、学んで、動いて、変えていく、これを意識した取組となっていくように、公民館等の取組に対して助言していただきたいと思います。

支援内容については、資料に記載しておりますように県が2分の1を補助しまして、上限額等も30万円と設定をさせていただいています。

こういった公民館等と地域団体が連携した取組、県内各地で行われたものは、県の公民館連絡協議会とも連携して、その活動事例を県の研究集会等で紹介したり、活動を掲載したリーフレットを配布したりするなどして横展開を図っていきたいと考えています。また、ウェブページ等にも掲載して広く周知していきたいと考えております。

地域の5年後、10年後の姿を見据えて取組を進めていこうとする公民館等の背中をそっと押すようなイメージの事業、将来的な地域づくりなどのベースになる、当事者意識を持った人づくりにつなげていきたいというふうに考えております。

説明は以上です。

○有馬会長 ありがとうございます。

御質問や御意見がありますでしょうか。

ふるさと教育というキーワードが、社会教育の中でも学校教育の中でも大事にしてきた、島根の大事な事業の中心的なキーワードでもあるというふうに感じます。

御質問ございませんか。

○久佐委員 事業については、今の「学びのサイクル」による人づくりも新規事業ということでお聞きしましたが、従来の事業は今までとそう変わらないということでした。昨年度のこの会でも、中央教育審議会の答申の「つながる社会教育」とか「人づくり」とか、そういったものをキーワードに意見を求められた中で、「横串」であるとか、「境界を溶かしていく」といったお話が、資料の中や昨年度のこの会の中でもあったように思っています。今日の会では、そのことをテーマにもう一度議論をしていこうという話で、私はそれを議論することはとても大事だと思っています。例えば皆さんが実施される既存の事業であっても、そういったことを我々委員に意見として求められると同時に、今、社会

教育行政の中で取り組んでおられる方が実際どういうふうにそれを思っておられるかとか、昨年度からテーマとして取り上げられているものを今年度の事業の中でどうやって形として生かそうとされているかというものがあれば、それをお話として聞かせていただくと、我々も肌で感じていることをお話しさせていただくことができます。実際県の社会教育振興行政の中で研修なり、事業体の中でそれを今どのように模索されているのかということがかみ合っていくと、さらによりよい議論につながるのではないかと思います。今ここで発言すべきことではないかもしれませんが、ぜひそういうことも踏まえていただけるとありがたいです。以上です。

○有馬会長 いずれにしましても、社会教育課を中心にして行っている県の社会教育諸事業というのが代々受け継がれていて、行政内でも検討されているわけですし、私ども外の者にも分かりやすく広報していただいている、県民挙げて、関係機関等こぞって社会教育が振興するように機能していけばよいという気持ちを、さきほど久佐委員もおっしゃったのではないかというふうに思います。

それでは、次へ行かせていただきまして、続いて、中国・四国地区社会教育研究大会島根大会について、ここまでのところで現状について御説明いただこうと思います。

よろしくをお願いします。

○福村SL 失礼します。中国・四国地区社会教育研究大会は、令和5年11月16日の木曜日、17日の金曜日、2日間で開催いたします。

この大会は、これまで島根県が進めてきた社会教育をベースにして、島根ならではの部分を大切にしながら、平成30年12月21日に中央教育審議会から出された、いわゆる「社会教育振興答申」という答申の中で出てきた理念を重ね合わせ、新たな社会教育の方向性を考えるとともに、社会教育の可能性や、先ほど教育長からもありましたけれども、役割、立場、存在感など、価値に光が当たるような、そのような大会になればよいと思って進めております。

大会スローガンは、「縁結びの地 島根で 学ぼう、つながろう、始めよう！ ～地域の人づくり・つながりづくりを進めるために～」としております。縁結びの地であるこの地に、神在月に開催をするというところで、中四国、その他から集まっていたきたいというふうに願いを込めております。

会場は県民会館を貸し切って行います。

次に、参加者ですけれど、御覧のとおり多くの方とともに学び、語り、つながりたいというふうに思っております。ぜひお誘い合わせの上、御参加いただきたいと思います。参加費は資料代込みで3,000円となっております。

5ページに日程を載せていますが、6ページに次第が載っておりますので、そちらから少し内容をお話しさせていただきます。

1日目、午後からスタートとなりますけれども、アトラクションとして浜田商業高校の

郷土芸能部の皆さんに神楽の演舞をお願いしようと思っております。研究大会では、よく何かを見せて終わりというようなことがございますけれども、さらに突っ込んで、この演舞を行った生徒さんたちにインタビューをする、あるいは、できれば地域指導者の方にもちょっとお話を伺うとかしながら、その演舞に至るまでの地域とのつながりみたいなどころに、少し光を当てることができればいいと思って計画をしているところです。

続けて、開会行事は御覧のとおりです。この中に社会教育委員被表彰者の紹介も考えています。

基調講演は明石要一先生をお願いをしています。明石先生は、中央教育審議会の答申をつくるに当たっての座長を務めておられます。特にこの答申についての内容を熟知しておられ、これから目指していく社会教育の在り方、その辺りも踏まえた上でお話をいただけるのではないかと考えているところです。具体的な内容についてはこれから詰めていくようになると思います。

続きまして、パネルディスカッションですけれども、答申の中で謳われています「開かれ、つながる社会教育の実現」、その具現化に向けたいろいろな対話になればと思っております。コーディネーター、パネリストの皆さんはそちらに載っていらっしゃる方々です。島根が誇る実践の方々をお願いをしています。内容は、社会教育と学校と少し掛け合わせた話になっていくのではないかと考えているのですが、具体例、具体の話を進めていただけるのではないかと考えております。

そして、明石先生にコメンテーターとして入っていただいて、これらの話がどういう位置づけになっていくかということについて少しコメントを入れていただきながら、2日目の分科会への橋渡しのようなところでお話をいただければと思っております。

1日目は閉会行事をして終わります。

2日目は分科会になります。今までと少しスタイルを変えて、「しまねの社会教育で大切にしたいこと」にある、リンゴの木の絵がなんとなくイメージできるようなにしたいと思っております。いろいろな形で社会教育が他部局と関わって効果を上げている、あるいはそういう思いを持って社会教育を取り入れている、そういうことが伝わるような分科会になるように考えているところです。

この分科会の項目立てについては、今回、島根大会で新たにつくったものです。イメージのすり合わせのところから丁寧に行い、中四国の各県に発表を呼びかけました。発表者もまだはっきりと決まっているところではありませんが、今のところ御覧のような方々でお願いをしているところです。どの分科会も島根県から1つの事例発表をするというふうを考えています。

1つ目は、「地域づくり」と「社会教育」を掛け合わせる、地域づくりの中に社会教育の視点も入れる、前回は「えーひだカンパニー」の事例発表も聞いていただきましたけれども、そういった内容で香川県と島根県の事例発表を聞いていただきます。

2つ目は、これは今までに全くなく、チャレンジングな内容ですが、「福祉」と「社会教育」と掛け合わせて考えてみたいというような内容で、広島県と島根県が発表します。

3つ目の「子ども」掛ける「社会教育」の部分では、高知県と島根県が発表します。島根県の発表については、今日発表していただきます川本町の事例を発表していただきますので、本日一緒に勉強していきたいと思っております。

そして4つ目、「社会教育委員」掛ける「未来」ということで、社会教育委員の皆さんの活躍ですとか活動、そういったところに視点を当てていきます。鳥取県と島根県が発表します。

今までの大会はただ「分科会」という名前でしたが、島根大会では、タイトルを「人づくり・つながりづくりを進める分科会」としました。何の分科会なのかというところを少し明らかにして、社会教育は人づくり・つながりづくりを進めるというような思いを主張するような形でタイトルをつけております。

そういった人づくり・つながりづくりを進める分科会を2日目に行いまして、12時になりましたら会場ごとに終了というようなところで考えております。

大変駆け足で説明いたしました。この後、福本からも説明があると思いますし、川本町の発表にも関わってくるところが大いにあると思います。どうぞ皆様、お誘い合わせの上、御参加いただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

○有馬会長 前回の会議でも少しお話があったことをございますけれども、今年の秋に中四国大会をいよいよ迎えることになりました。

今、説明にもありましたけれども、この大会を迎える準備として、県内の社会教育委員の代表であられる各地区の理事の方々の集まりの社会教育委員連絡協議会というのがございます。そこが中心になって実行委員会を立ち上げて、そこで社会教育課の御指導を受けながら、言わば実行委員会がこういう素案をつくり上げてきたという形を取っております。今やっと形が整ってきたということで、間もなく県外に対しても大会の案内を示していかなければならないという時期を迎えてくるわけでございます。

まだ変更の余地はあるわけでございますので、今日の説明を受けまして、皆さんの方からも何か御助言がいただければありがたいかというふうに思います。何か御意見や御質問がありましたらお願いしたいと思います。

御承知のように、中四国は9つの県がございますので、9年に一度回ってくる大会ということになります。私はたまたま前回にも関わっておりましたけれども、今回はコロナの関係で2年延びてしまい、11年ぶりの島根大会ということになりました。本当は一昨年終わっていてもいい大会と言えるかもしれませぬ。

今、教育長さんのお話にもありましたように、島根の社会教育というのは非常にレベルも高い、立派だというようなことが県外にもとどろいているわけでございますので、それらの期待に応えるいい大会にしていく必要があるという緊張感があります。私は力になり



ませんけれども、大会に一人でも多く参加してもらおうという気持ちで、やや緊張感を持っておりまして、お手元に薄紫、これは県民の歌の色合いを反映させた色ですけれども、名刺を作って、これを様々な場面でお配りしようと思っっているところです。

450名ぐらいは来ないと採算が取れないという言い方はおかしいですが、一人でも多く参加していただくという努力も一方では必要ですし、いい大会、質の高い学びがある大会にすることの方がもっと大事かもしれません。皆さんのお力添えもいただいて進めていきたいと思っております。よろしくお願ひします。

それでは、御質問とか御意見はないでしょうか。

○大地本委員 質問ですが、中四国大会ですが、これはどこの県、中四国以外からでも参加が可能でしょうか。

○福村SL はい、可能です。

○大地本委員 分かりました。ありがとうございます。

○福村SL できれば全国津々浦々からたくさん来ていただけると、盛り上がるのではないかと思っております。

○有馬会長 参加資格などはないですね。

○福村SL はい。社会教育関係者でなくても参加は可能です。

○有馬会長 社会教育委員が中心になって開催している大会ですが、参加していただく方に制限はありません。例えば婦人会の方とかPTA関係の方だとか、コーディネーターの方も、いろいろな形で社会教育を学ぶ場として、広く門戸が開かれているというふうに言っっていると思います。

それでは、続いてまだ議論すべきことがございますので、次に行かせていただっいでよろしいでしょうか。

皆さんの中でお気づきがありましたら社会教育課の方へお願ひしたいというふうに思っいます。福村SLが窓口になっていますので、よろしくお願ひします。

それでは、その次、前回、高尾副委員長から質問がありましたが、博物館の役割と現状について社会教育課より説明がありますので、よろしくお願ひします。

○山本GL それでは、失礼いたします。

島根の社会教育における博物館の役割についてでございます。資料がございますが、お手元にカラー版、一番上に資料1と打ってありますリンゴの木の図があると思っいます。資料1から5までございまして、それに基づいて説明をさせていただきます。

島根の社会教育における博物館の役割についてですが、資料1のリンゴの木でイメージをしております。人づくりを進めていく土壌における学びつながらる場の一つが博物館でございます。歴史、芸術、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管をし、展示しながら各種事業を行っいまして、あわせてそれらの資料に関する調査研究を進めていっながら、地域に根差した学びの場を提供しております。

続いて、資料2ですが、県が所管する博物館、類似施設も含まれますが、今年度の講座やイベント等を簡単にまとめております。常設の展示に加えまして、年間通して様々なテーマ設定の下で学びの場を提供しております。例えば、古代出雲歴史博物館のギャラリートークですが、担当学芸員による展示解説等を行いながら大人の学びの場を提供しております。また、資料の一覧表にはございませんが、八雲立つ風土記の丘ではガイドの養成講座等を実施いたしまして、学んだことを生かすことにもつなげております。

続きまして、資料3についてです。所蔵の資料を活用したアウトリーチによる学びの場の提供についてです。博物館に所蔵されている資料や学芸員等の知識を学校等で行われている学習の場に提供し、子どもたちが学びを深めることに寄与しております。

そして、資料4ですが、博物館法の一部を改正する法律についてです。この法律については令和4年4月に成立し、令和5年4月1日から施行となっております。改正のポイントは、登録要件の見直しによりまして登録博物館が増える可能性があることです。あらゆる人に対する学びを提供する場の増加が期待されております。また、博物館の役割に文化、観光の拠点としての役割も追加されるなど、より魅力的な活動を展開されることが期待をされております。

最後に、資料5についてです。先ほどの一覧表にもございました施設の一部でございますが、県のふるさと教育のホームページにリンクを貼り、広く情報提供を行っております。

以上のように、博物館は子どもから大人まで様々な世代を対象とした学びの場であるとともに、学んだことを生かす場でもございます。

簡単ではございますが、以上で博物館の役割及び現状についての説明を終わります。

○有馬会長 ありがとうございます。

博物館とか美術館とか図書館というのは重要な社会教育施設で、社会教育を考えていくときには外してはならない施設ですけれども、私どものこういう会の場合でも話題に上がってくるのが少なかったという、そういう反省もあつてのことだと思っておりますが、高尾副委員長さんがこの前御質問なされたわけでございます。

高尾さん、何かありますか。

○高尾委員 丁寧な御説明ありがとうございます。

島根県内の各機関の取組、非常に重層的に一覧化していただいて、改めてお礼申しあげるところであります。

地域と人材育成ということで、この場では非常に時間を割いて、大きなテーマとして議論されております。そのことが一番大事だと思いますが、日本全体含めて、例えば科学技術の研究、若者が大学とか大学院等でなかなかポストが得られないとか、そういう面で将来的にそういう研究部門が先細りするのではないかという、そういう大きな懸念が今あると伺っております。論文数も随分減っていき、将来日本からノーベル賞の受賞者が出ないのではないかと、今危機的状況にあると言われている部分があります。必ずしもそうではな

いかかもしれませんが、子どもの頃から、やはり広い視野でいろいろなものに興味を持っていくという、そういう育ち方というのが一方で大事だというふうに思っておりますし、地方でできることというのは、やはりいろいろな意味で都会地とは違う学びの場を提供できると考えております。法律改正もありましたけれど、それを機にますますこの取組が進んでいくということを期待させていただきます。御説明ありがとうございました。

○有馬会長 私たちとしては、博物館等も県民に広く関心を持っていただいて、利用していただいて、社会教育の推進の一翼を担っていただくように、いろいろな点から我々も考えたり提案したりしていく必要があるということになるかと思えます。

それでは、次に行かせていただきますが、よろしいでしょうか。

○山本GL 事例発表に入る前に、先ほど久佐委員様の御質問について説明をさせていただきます。

先ほどのリンゴの木がありましたけれども、島根の社会教育では非常にこの図で表していることを大切にしております。先ほど高橋の説明にもありましたが、集って楽しんで、そこで学び、こういうことをしたい、やってみたいという思いがあって、そこでつながりをつくりながら動いて変えていくということを島根の社会教育では大切にしていまいりました。それを回していく一つの手段が、先ほど説明しましたそれぞれの事業であったと思えます。実際に我々は他部局とも連携をしながら、この後、川本町の事例発表もあります。境界を溶かしていきながら動きをつくっていく、まさにそういった事例だと思っておりますので、また事例を見て御意見をいただければと思っております。

それに関連して、お手元の資料の12ページに社会教育主事講習の今年度の一覧を載せております。社会教育の専門家を養成していくという講習でございますけれども、今年度、これらの講習に県内から92名の方が受講をされました。実際には分割履修とあって、2年、3年かけて単位を取得される方もいらっしゃいますが、92名のうち、今年度予定では66名が修了され、社会教育士が誕生することになっております。公民館職員が約3割、市町村教委の方が大体2割いらっしゃいますが、その他にもコーディネーターであったりNPOであったり、民間の企業の方も社会教育士として誕生しております。我々は今後そういった方々のネットワークをつくっていきたいと思っております。それぞれの活動で人がつながりながら動きをつくっていく、またその小さな渦が大きな渦に広がっていく、先ほどの、集って、楽しんで、学んで、動いて、変えていくということを大切にしながら、横展開をしていきたいと思っております。

そこで、今年度から、県内5つの教育事務所管内で社会教育主事と社会教育士のネットワークをつくる研修会をスタートいたしました。来年度はさらに広げていながら、公民館職員、コーディネーター、民間の方も入っていただいて、地域単位でネットワークを広げていき、最終的には島根県全体に広げていく、またそれが全国ともつながっていく、そういったことを今年度から始めているところでございます。各事業を通して人材の育成、

養成を図り、横のつながりや様々なつながりをつくりながら社会教育を展開していきたいと思っております。

事例発表を通しながら、また意見交換させていただければと思っております。以上でございます。

○有馬会長 ありがとうございます。

今のお話について何か御意見や御質問ありませんか。

社会教育士の誕生から、やっぱり新しい社会教育の組織づくりというか、つながりづくりも検討なさっているわけです。今後にも期待したいところです。

それでは、次に行かせていただきますが、今日は特別に事例発表をこの場でお願いすることになっております。

今回、事例発表いただきますのは、川本町で行われております、「「あそラボ」」の取組でございます。中国・四国地区社会教育研究大会の分科会において、川本町さんにはその中の1つを担当していただいて、発表する予定になっております。今日はその中の代表として、発表していただくことになっております。

川本町の皆様、遠方よりお越しいただきありがとうございます。よろしく願いいたします。

○福本SL それでは、皆様と画面共有しながらお話をいただこうと思っておりますので、見えやすい位置に御移動いただけたらと思っております。よろしく願いいたします。

先ほども有馬会長からお話がありましたけれども、本日、川本町で取組を進めていただいております、「「あそラボ」」の取組について事例発表をお願いさせていただきました。本日4名来ていただいておりますので、簡単に御紹介をさせていただきたいと思っております。まず、「あそラボ」の活動拠点になっておりますコミュニティーカフェオレンジの店主をしておられます、大村さんです。

○大村氏 大村です。本日はどうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○福本SL 川本町教育委員会のほうから坂根課長様。

○坂根氏 坂根です。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○福本SL 同じくまちづくり推進課のほうから伊藤課長様。

○伊藤氏 伊藤です。よろしく願いいたします。（拍手）

○福本SL そして川本町の派遣社会教育主事の竹田さんです。

○竹田氏 竹田です。よろしく願いいたします。（拍手）

○福本SL それでは、早速ですけれども、発表をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○大村氏 皆様、改めまして、こんにちは。本日は貴重なお時間をいただき、どうもありがとうございます。

自分の方から「あそラボ」の活動の紹介をさせていただきますが、動画をつくってきて

いますので、そちらを見ていただければと思います。8分ほどの動画になります。それでは、流させていただきます。

〔映像視聴〕

○大村氏 どうもありがとうございました。

今、子どもたちの活動の様子を紹介させてもらいましたが、どういった経緯で、この「あそラボ」が立ち上がっていったのかについては、竹田先生の方から紹介していただきます。

○竹田氏 それでは、続いて私から、先ほどのような活動がどのような町で起こっているのかというところを説明させていただきたいと思います。

川本町は、御存じの方もたくさんおられると思いますが、島根県の真ん中に位置する町でして、人口が約3,100人程度、公民館エリアが3つありまして、保育所も3つあります。特徴的なのが、小学校、中学校、高等学校がそれぞれ1校ずつで、規模も全校児童が小学校128名、中学校57名、高等学校214名です。地元の子でいうと、一学年大体20名程度の人数になっております。画面に写っております左側の悠邑ふるさと会館という大きな建物がありまして、この後も実はここで行われたイベントの紹介もさせていただこうと思いますので、楽しみにしていただけたいと思います。特産品であるエゴマですか、もうじき開花をするのではなかろうかというイズモコバイモ、森の妖精と言われていまして、すごくきれいな可憐な花が咲きます。そして、先の映像にもありましたが、一番右下のところに、廃線になった三江線、この駅の利活用をどのようにしていこうかということに対して、その担い手の一つが子どもたちが中心になってやっている活動であることを見ていただきたいと思います。

今日は、お伝えすることが3つありまして、1つ目が立ち上げの背景、2つ目が活動の実際、あと、今後の方向性といった、この3つの点についてお話をさせていただきたいと思います。

これは令和元年8月に行われた2泊3日のサマーキャンプのときの1枚ですが、上段が小学生で、下がキャンプリーダーとして参加してくれた高校生です。このほかにも地域の方が数名お手伝いいただいておりますが、ここには写っていません。次の1枚ですが、これは、「かわもとぼかぼか親子プロジェクト」という事業の中で行ったもの、これは同じく令和元年の10月、ハイキング登山の様子です。町内の家族の皆さんを対象に行いまして、後ろの辺りに高校生が何名かいて、実はこれ大村さんです。その隣に自分が写っています。令和元年度、教育委員会の事業に高校生が関わって、大村さんも関わってやっていたということが現状した。

そんな大村さんと一緒に活動していく中で、大村さんの思いに触れることになりまして、町づくりはまず、人づくりが大事だとか、川本町に集まる生徒たち、しまね留学をしてくる高校生が214名の中はかなりいますので、その子たちの成長の支援ですとか、企画力、

運営力、あと対話力のある高校生の育成だとか、「高校生」×「地域のひと、もの、こと」は、川本町の町の魅力のアップになるのではないかと、一緒に活動する中で感じました。そして、時を同じくして、島根中央高校のまちごとキャンパス構想の策定に関わらせていただきました。二本柱の一つに、地域と連携した教育活動の推進・充実というものが、実際に子どもたちが地域に出かけていく回数ですとか、内容ですとか、地域と関わることを大いにやってほしいというようなことを社会教育の方で命を受けておりまして、そこで自分も関わる機会が多くなっている状態でした。

そのタイミングに大村さんの思いとか取組だとか、町教育委員会、まちづくり推進課の思いとか願いだとか、高校のキャンパス構想の取組だとか、そういったところが重なっていくと面白いのではないかと感じていました。令和元年の終わり頃に何とかならないかと考えていたときに、何とタイミングよく、県の「ふるさと人づくり推進事業」というのが令和2年度から始まるということで、その中の「ふるさと活動モデルづくり事業」に申請し、ここに向けてみんなで作っていこうということになりました。

令和2年度は、実はコロナが猛威を振るい始めた年として、なかなか思うような活動はできませんでしたが、今日までの約3年間、ちょっとずつちょっとずつ活動を積み重ねながら、今見ていただいたような動画のところまで来たのが現状です。この後、もう少し詳しく大村さんから説明をしてもらおうと思いますので、よろしくお願いします。

○大村氏 先ほどの動画で最後の方にベンチャーキッズスクールというものがありましたが、あれは、島根県の中小企業課の事業を使って行っています。自分が幾つか大切にしていることがあり、上の子がさらに下の子を支え、下の子がさらに下の子を支えていくというような循環が生まれていくと、自然と大人がいなくても、「上の子が下の子を」という文化がどんどん育まれていき、自然と自立していくような流れができるのではないかと考えています。そこに、ちょうどベンチャーキッズスクールという県の事業がありまして、自分たちで価値をつくっていけるという、その感覚も身につけられると思ったわけです。下の子を支えていこうという文化に加えて、自分たちでもこの地域を何とかしていける、自分たちの仲間と一緒に頑張っていけば、何とか自分たちのコミュニティーを支えていけるという感覚につながるのではないかと、このころで、価値づくりというところと上の子が下の子を支えていくというところを個人的には大切にしながらやっています。

先ほどのベンチャーキッズスクールの感想を子どもたちは述べていたのですが、あれが、11月くらいのイベントの出店したときの感想で、12月の末ぐらいにもう一回、町内のイベントに出店して、今年度のベンチャーキッズスクール事業を終わろうと思っていましたが、その12月のイベントが中止になってしまいました。どうしようか悩んでいたときに、小学生たちと中学生たちが話し合いをして、「もうつくっちゃおう、イベントをつくってしまおう。」というところに話が進んでいきました。そのタイトルがこの「全人類が楽しめる祭りイエイ♪」というものでした。先ほど竹田先生が最初の紹介のところで言わ

れていた邑南ふるさと会館という大きい施設を使って、開催に向けていろいろ計画をしました。2月16日に実施をしましたが、本当に何か自分もどうなるのかという不安ばかりでした。しかし、このタイトルのとおり、本当に子どもたちの純粋にみんなに楽しんでもらいたいというところが、自分の中ですごい支えになって、それに共感したのは自分だけじゃなくて、地域の大人たちも、やっぱりその子どもたちの純粋な無垢な思いにすごく共感をしてくれました。開催の直近までばたばたするような、前日とか当日もかなりばたばたしていましたが、でも本当にいいイベントが開催されたというふうに思っています。これから、その企画・準備のところの動画と、当日の様子、あと、子どもたちだったり、そのときに手伝ってくれた大学生だったり、高校生とか、地域の方の感想も含めた9分ほどの動画になりますので、また御覧いただければと思います。

〔映像視聴〕

○大村氏 どうもありがとうございました。

「あそラボ」では「『やってみよう！』を地域でかなえる」というテーマを掲げていますけれども、自分自身もこういう形をつくっていきたいという、自分自身のやってみようことを本当にこの川本という地域でかなえさせてもらっていると思っております。まだまだここでは紹介し切れなかった子どもたちのたくさんの活躍があります。それこそベンチャーキッズスクールの事業の組立て、例えば、中学生たちが中心になって申請書を作って25万円の補助金を得たという経験もしています。信じて投げれば何かしら返してくれるというのは、本当に毎日毎日、自分自身勉強させてもらいながら感じさせてもらっています。最後に竹田先生の方から、この取組の今後について説明してもらいます。

○竹田氏 子どもたちの様子を、映像ではありますが御覧いただいて、私自身も感動した部分もありましたが、皆様にも伝わったのではないかと思います。大学生が出ておりましたけれども、実は、その大学生のうちの一人は県外の子です。島根中央高校にしまね留学をしまして、今年度1年間大学を休学し、「あそラボ」にインターンをして1年間どっぷりつかって活動をして、ついこの間、東京の大学に帰って行きました。大学に復学するけど、何かの機会にはぜひ関わりたい、友達を連れてきますと言ってくれました。そのように、大学生もどんどんつながっていき、つながりがつながりを産んでいき、川本町がますます元気になり、盛り上がっていくことを期待しているところです。

以上で取組の紹介を終わります。ありがとうございました。（拍手）

○有馬会長 発表していただきました川本町の皆さん、ありがとうございました。

これからしばらく時間をいただきまして、今の事例発表を聞きながら皆さんの方から感じたこと、御意見等を出していただけたらと思います。今の発表に対して、御質問でもあれば出していただけたらと思います。質疑応答のような感じでしばらく進めたいと思います。時間を30分や40分いただいていますので、たっぷり議論ができたらと思っていますので、よろしくをお願いします。

今、川本町さんの発表は、まだ本番のために十分準備したものというようなものではなくて、今、まさに準備中です。これからいろいろお考えになるとと思いますが、今日のこの場も、これから川本町の皆さんが発表に向けて、どんな準備をしていけばいいかということをお考えになる上で参考になる時間になればと思っております。

今の映像が10分ずつ2回ありました。それからマイクでの説明が10分程度ありました。実際に本番は第3分科会で子どもを中心にした、つまり、地域における若者をどう地域が育てていくか、そこに社会教育がどんなふうに作用していくか、そういう分科会であるというふうに思います。当然でしたけれども、川本町の小学生、中学生、高校生、大学生に至るまで、しかもそれが大人とも交じり合って、若者が元気に育っていく町を目指しているという感じを受けました。

どうぞ、御質問があればお願いします。

○豊田委員 発表ありがとうございました。とてもいいなと思って僕は感動しました。いいなと思ったポイントはありますが、質問を2つさせてください。1つは、この「あそラボ」を見ていたら、駅舎、廃線になった駅舎をベースにやっぺらっぺらしたように見えたのですが、なぜその場所にしたかということ伺いたいのが1つ目です。例えばですけど、公民館って、なかなか公民館に人が来ないみたいな課題がある中で、公民館でやるっていう選択肢もあったと思いますが、なぜその場所にしたのかということ伺いたいのが1つ目です。2つ目は、あのような活動をつくるには、すごく良質な伴走がないと生まれてこないのではないかと考えていて、特に大村さんが子どもたちに、伴走するとき何意識されたかとか、大人たちが子どもたちに関わる時に、どういう伴走をされていたかということです。あと大村さんを誰かが伴走してきたのかということも、後ろの課長さんかもしれないですし、竹田先生かもしれないですし、その辺り2点伺いたいです。お願いします。

○有馬会長 御質問が2つありました。活動の場所、それからこの事業を進めていく主体者の狙いとか協力者の存在とか、その2つです。

○大村氏 御質問どうもありがとうございます。まず、1点目、なぜ公民館でなくルールバイクイベントなのかということですが、自分は、もともと地域おこし協力隊で川本町に来させてもらっていて、その協力隊のときに、最初は高校の寮のコーディネーターという形で入っていました。そのときに、ルールバイクイベントの主催をしている観光協会におられる方とつながって、年代も近かったので結構話しやすい関係性が生まれていきました。その後自分が「あそラボ」を立ち上げて、観光協会が行っていたルールバイクイベントに、子どもたちの遊べるエリアというのを「あそラボ」の方でしてくれないかというような依頼がありました。こちらとしても、自分たちでイベントを企画して、そこに人を招くというのは、結構大変なエネルギーがいるので、ぜひイベントに乗らせてもらえればという形でルールバイクイベントへの協力が始まりました。基本、毎月1回という頻度で



実施されていますので、こちらとしても参加しやすいというのがありました。自分と主催の方と関係性ができていて、うまくいかなくても温かく見守ってくださるといふか、一緒に育ててくださるといふふうなスタンスでいてくださっているという、そこがすごくこちらとしても子どもたちを預けやすいというのがありました。

なぜ、公民館ではないのかというところをさらに加えると、子どもたちが関わりやすい公民館の活動、「あそラボ」で取り組みやすいような形がそこまでなかったということと、こちらに依頼されてくることがあまりなかったからです。先ほどの映像に「まちセンマルシェ」という活動が少し出てきたと思いますが、そういう年に2回ほどあるイベントとかには参加しますが、常に公民館でいろいろイベントがあるというわけではありません。多分、「あそラボ」自体が公民館機能の代わりを果たしているというようなどころもあるような状況が川本町にはあります。その辺りで、自分の説明の仕方が変な誤解を生んでいたらすみません。

○坂根氏 すみません、失礼します。大村さんがおっしゃったことは間違いではありませんが、少し補足させてください。まず、拠点となっているのは、先ほどのレールバイクのイベントで、旧JR川本駅、石見川本駅を活用しておりましたが、本来の拠点というのは別にございます。カフェオレンジという、この大村さんが代表として営んでおられるオープンスペースがあります。ここは、川本の空き店舗を活用して、独自に立ち上げられたところですが、そこを使わせていただいて、子どもたちのサードプレイスの的な場所にを使わせていただいているというのが現状でございます。

公民館については、川本町内に3か所ありますが、いずれも子どもたちが学校帰りに集まりにくい地理的、位置的な問題があります。このカフェオレンジという「あそラボ」の拠点になっているところが、町の中の商店街というか、中心部にございますので、学校帰りに子どもたちが集まりやすいという地理的な面があるというふうに思っています。

2点目の伴走について。

○大村氏 2点目についてなんですけれども、意識していることは、取りあえず、否定しないということと、まずは受け止めるということが一つあります。自分は失敗しても全然問題ないと思っています。失敗から学ぶことはたくさんありますし、学生までの失敗というのは結構評価されることが多いので、自分は失敗してもいいという感じで押し出すことを意識しています。でも結局、子どもにはすごい力があるので、手応えを感じてもっといけるもっといけるっていう感覚になったり、ほかの大人の方から褒められるようないい言葉をかけてもらったりして、こちらがそこまで声かけや、先回りして動いておくようなことをしなくても、うまくその流れに乗って勝手に自走していくというような状況があります。ただ、ベンチャーキッズスクールなどの事業の組立てというところは、自分もまだまだ経験は浅く、うまく伝わっているのかは分かりませんが、今まで自分が培ってきたものを教えています。ゲーム大会を開くなど自分たちで楽しむようなイベントは中高生主体で

企画させながら、大学生たちに任せて穴がないように見てもらったり、サポートしてもらったりするようお願いしています。伴走のところで意識しているのは、そんなところになります。

自分に伴走してくれているということについては、自分は大学で地域づくりを学んできましたが、社会教育についてしっかり専門的に学んだということをしていない人間です。そこを竹田先生が、自分のやっていることは社会教育の文脈に置き換えるとういうことだという感じで整理してくださるので、それがすごくありがたいです。自分のしていることがずれていないとか、軌道修正した方がいいとかがそこで分かるので、それが非常に大きいと思っています。後ろにおられる課長たちが、温かく、遠くから見守ってくださっています。自分が川本町に地域おこし協力隊として来たときから、課長にはお世話になっています。大きな予算をつけてもらったり、いろいろと心配してくださっているというのが人づてに伝わってきたりして、それに何か応えたいというような関係性もあります。今まで一緒に何かをしてきたという経験や、遠くから見守ってくださるといようなスタンスが、直接的な伴走ではないかもしれませんが、自分にとってはすごく心強く、ありがたいというふうに感じているところです。以上になります。

○豊田委員 ありがとうございます。

○有馬会長 ありがとうございます。今、豊田委員さんからの御質問が一つあっただけでございますので、あと全ての皆さん、何か御質問でも御意見でも感想でもおっしゃることがあると思います。時間は十分ありますので、どうぞ。

○板垣委員 公民館を運営している立場でございます。公民館を選択肢の中から少し外されたという経過の中で、皆さん方の使い勝手という面で、どの辺が、こうであったらいいというようなところを、逆に教えていただければ、我々も公民館運営の参考にさせていただきたいと思うところでございます。それから、まだ動画では、皆さん、小中高大学生といろいろと出てらっしゃいましたが、世代が上がったおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんといった方々は一緒に見ておられたのか、参加されていたのか、その辺を教えていただけたらと思います。

○大村氏 御質問どうもありがとうございます。自分が、「あそラボ」での子どもたちを見ていて感じるのは、やっぱり人に集まるということです。居心地のいい場所とか、ゲームがあるとか、Wi-Fiがあるというのは、結構重要ではあると思いますが、でもそれ以上に、やっぱり中高生の男の子などは、大学生のお兄さんと話せる、一緒に遊べるというところに引かれて来ていると思いますし、小学生は、基本的に「あそラボ」の対象ではないのですが、遊んでくれる中高生、大学生のお兄さん、お姉さんがいるから遊びに来るといようなことも起きているので、少し上のお兄さんとかお姉さんがいると自然と集まってくるという感じがしています。それは公民館に限らず、多分、どんな場所においても、何かそういうふうなことを子どもたちが求めているという気がしています。公民館に、さ

らにあるといいのは、ゲームはやはり今の時代においては強いというのは正直思います。それを親御さんによっては、いい悪いって判断をされる方はいると思いますが、自分が見ている感じでは、家の中で一人黙々とゲームやるよりも、いろいろな世代、小さい人もいれば、自分より上の子もいるような中でわいわいゲームをしている方がまだいいのではないかと考えています。

あとは、「あそラボ」に来ている子は、遊びに来るというだけではなくて、ちょっと安らぎを求めにくるというような子もいます。悩んでいることを取りあえず吐き出せる相手は、お兄さん、お姉さんとかでもできるかもしれないんですけども、やっぱり、安心できる大人の人、そこに行けばいつも会えるってというような、常に変わらない安心できる大人の人というのは、そういう子たちにとって結構大きい存在なのではないかと思っています。基本的にはやっぱり「人」ではないかと思っています。

「あそラボ」の今後の課題としてあるのが年上の方の取り込みです。「あそラボ」は今、中高生の居場所と認識されてきましたが、逆を言えば、中高生とか大学生よりもさらに上の世代が入っていいものなのかというような認識になっています。拠点になっているカフェオレンジという場所を、そういう人たちも集まれるような形にしていくというのは一つ課題になっています。

ただ、その拠点ではなかなか交流は生まれませんが、イベントなどに行くと、やはり子どもたちが人のつながりの核になっています。子どもたちが遊べるようなブースは、「あそラボ」の子たちが様々なイベントで任せてもらえているので、そこで小さい子やその保護者の世代と関わることができます。高齢者に対しては、昔、自分で作った幾何学模様の塗り絵を高齢者の人に使ってもらおうプロジェクトを進めた子がいて、そういう子は高齢者サロンに行っていて関わっていました。今後、コロナも5類になることが予定されているので、そのところも含めて今後どうしていくといいかというのは、自分の中での一つの課題ではあります。拠点ではないのですが、イベントを通して、いろいろな人との交流はちらほらあるような状況になっています。

○板垣委員 大変貴重なお話ありがとうございました。

○有馬会長 ありがとうございました。

どうぞ、他の人、お願いします。

○久佐委員 御無沙汰しております。土の根を開墾されたところから始められた、あの畑がすごくきれいになっていたり、カフェオレンジにあんなにもたくさん入っていたりして、初めて展開したときからわずか2年の間に、すごく変化を感じさせていただいて、すごいと本当に思いました。

私は学校の者なので、少し学校との関係でお話をさせていただきます。当初高校の魅力化であるとか、高校の地域課題解決型学習とか、そういったものの位置づけの中で、地域活動もというところも今回の企画のスタートにあったのではないかと思っています。完全に個

人がフリーで参加する地域活動もあれば、部活動という学校の 카테고리 だけどころある程度個人の意思が尊重される活動もあれば、授業という学校の教育活動の中での活動もあります。いろいろな中高生の関係をつくるというときに、いろいろな立ち位置の中で、子どもたちが関わるのではないかと思います。今日、今見せていただいたのは、どちらかというフリーな自主参加ということだったと思いますが、例えば、それが、県内の全域で実施されている、高校の魅力化の中でも、カリキュラムとしてやられるところもあれば、地域系部活動での関わりもあります。今、カフェオレンジさんの高校との関わりというものは、どういう位置づけになっているのかということや、小学生や中学生が関わる際には、安全のことであるとか、この活動はどういう位置づけで取り組まれているのかということになったときに、有志の皆さんの活動ということなのか、町の事業としての位置づけなのか、または、そこに関わる広報の仕方などはどうでしょうか。

子どもが活躍するとか、地域の大人もそれに関わって元気が出るという一つのビジョンとしては、とてもそれに反対する人はいらっしやらないと思いますが、それを実現するためには、幾つかの大人の都合が出てきて、連携が進まないこともあるのではないかと思います。例えば、行政にそここのところのバックアップをしていただくのか、何で自分たちが目標を共有する場に参加しなければいけないのかということも踏まえて、土壌ならしについて教えていただきたいと思います。

○大村氏 御質問どうもありがとうございます。高校のシステムのどうなのかというと、自分もうまく説明し切れませんが、今、基本的には、「あそラボ」の子たちは、有志で集まって、有志で活動しているというような状態になっています。コーディネーター時代も、高校生とかを連れて地域活動と一緒に行くことがありました。高校生を連れていくときには、取りあえず高校の先生にお話をして、この子連れていきますとか、保険のところ大丈夫ですかというのを確認していました。自分が地域おこし協力隊で来たときに、島根中央高校の校長先生も、先生があまり関わり過ぎると「あそラボ」の子どもたち主体のよさなくなるというような考えを持たれていました。基本、教員はなるべく関わらない、でも、応援はする、理解はするというようなスタンスを取られていて、そんなに高校と常に密になって何かをしているような形はありません。探究学習とか、いろいろ地域に出るような活動、授業とかはありますが、それらに「あそラボ」として関わるというのは、特にはないというような状況があります。

中学校に関しては、立ち上げの頃は、「あそラボ」って何だといった、謎に思われる状態がありました。高校の場合は、大村がやっているからということで先生たちも理解してくださって、特に問題ない感じで進められましたが、中学校については、それまで全然関係性がなかったのが、川本町教育委員会と一緒にやってる事業ですというところを最初文書で出させてもらいました。行政と一緒にやっていますということが分かるような形で進めてくださって、そこに地域に子どもたちをどんどん出していきたいと

いう中学校の先生が1人おられ、その先生とつながりができたので、中学生を有志で集めやすいような状態ができていったというようなところがあります。

小学生に関しては、ベンチャーキッズスクールの子については、保護者さんと自分とで毎回やり取りするというような形で進めていて、システムというよりもまだ俗人的なところでやっています。顔の見える関係性が生まれやすい人口の規模だからこそできると思っていて、それがシステム化できると多分ほかの場所にも転用がしやすくなるのかなと思います。自分もちょっとまだ見えないというところですが、この辺をしっかりと整理していけるといいというのは個人的に思っているところです。

○久佐委員 ありがとうございます。

○有馬会長 それでは、次にほかの人をお願いします。質問もですが、意見や感想もおっしゃっていただくといいと思います。よろしくお願いします。

○大地本委員 発表ありがとうございます。幾つか質問がありますが、まず、この事業の全体のことです。これは、川本町の教育委員会として予算を取ってきていて、カフェオレンジさんに委託してその事業をしているという認識で合っていますか。

○大村氏 はい。

○大地本委員 分かりました。ありがとうございます。今までのいろいろな事業について「公民館等」に対してとあります。その「公民館等」というのは、地域のそういう公民館的な機能を持っている組織に対しても、こういった事業が当てはまるということでしょうか。それは県のほうに聞いてみたいのですが、「等」というのがどこまでを含んでいるのかというのがちょっと聞いてみたいと思いました。あと、先ほどの久佐先生のお話につながるところですが、任意の生徒さんたちが活動に出ておられるということですが、それを学校側も応援して出していく、後押しをしているという関係性だとは思いますが、実際活動に出た生徒さんたちの状況について、情報共有みたいなことは何かされているのかというところをお伺いしたいです。

○有馬会長 それじゃあ、最初に事業費について県の方からお願いします。

では、課長さんお願いします。

○野々内課長 本日の資料でいいますと9ページになりますが、つながりづくり「ふるさと活動」実践事業、昨年まではふるさと活動モデルづくり事業とっておりました。その9ページのところでいいますと、2の事業内容のところの(1)の市町村支援、①市町村の取組のところのポツで、「公民館等や地域住民等の協力を得ながら」とあります。お問合せあった公民館等の等の部分については、ここでの意味はコミュニティーセンターとかまちづくりセンターという、いわゆる公民館ではない、公民館に類するような施設のようなことを言っておりますので、この等ではありません。ただし、その次に「地域住民等の協力を得ながら」とありますが、ここにカフェオレンジさんが該当するという意味です。絵にありますけれど、下の方に小さく島根県教委というのが緑色であって、その上にオレ

ンジで市町村教委というのがあります。そこが子どもや大学生・若者のふるさと活動を支えているという形になっていますが、事業の構築としましては、島根県としては市町村を支援し、その市町村が地元で活動される団体を支援するという形になっております。ここで高校生、中学生、あるいは小学生、大学生とかが一緒になって活動する、これを我々はふるさと活動と称しています。その前のページ、8ページにふるさと教育というのがありますが、学校の方ではふるさと教育というのを学んでいるというところを、実際に地域で実践活動を試みようというのがふるさと活動でして、そういったところを支えている場、実際の現実の成功例といえますか、モデルとなっているようなところがカフェオレンジさん、「あそラボ」さんだと思っております。以上です。

○石原副教育長 すみません、補足させていただきます。川本町さん、本当にありがとうございます。令和2年度から3年度に「ふるさと活動モデルづくり事業」ということでスタートさせております。その際に、世代を超えた人とのつながりづくりというものをつくっていただきたいということで、県の方の予算も確保してモデルということで取り組みを始めていただきました。それが令和2年度と3年度で、今年度から先ほど課長が説明しました、つながりづくり「ふるさと活動」の実践ということで、モデル事業から発展して進めていただいているところです。そういった世代のつながりづくりを期待してはいたけれども、素晴らしい活動に発展させていただいております、本当に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。当初いろいろ思い描いていたのですが、本当に実現できるのかどうかというのは、少し不安もありながらのモデル事業予算でしたので、形にさせていただいて、さらに、先ほど見せていただいたビデオでも本当に子どもたちが生き生きと取り組まれているということも実感させていただきました。このつながりづくりふるさと活動、この事業も令和6年度までの予定にしております。今後の事業というのは皆様の活動の状況ですとか、あるいは社会教育委員の皆様のお意見などを反映させながら、令和7年度以降の事業にも生かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○大地本委員 ありがとうございます。では、この「学びのサイクル」による人づくり推進事業とかも、別に公民館がしなくてもできる事業でしょうか。

○野々内課長 失礼します。社会教育課長でございます。学びのサイクルの方につきましては、地域の団体さんとこれは公民館等と一緒にやってということを立てつけというか制度設計させてもらっております。本当であれば地域単体だけでもできるかもしれませんが、公民館だけでもできるのかもしれませんが、今回は一緒にやってということだと思っております。ちょうどこの「学びのサイクル」による人づくり促進事業、今回新規事業でさせてもらっていて、ちょっと分かりにくいところもあるかと思っておりましたが、たまたま先ほどの「あそラボ」さんの発表の中で「全人類が楽しめる祭りイエイ♪」がありましたが、あれが一つの究極の答えかと思っております。なぜかといいますと、まさに「あそラボ」に集った子どもたちが、レールバイクイベントですとか、ふだんの大きなお兄ちゃんたち

との交流などによっていろいろなことに気づいたり、楽しんだり、あるいは達成感を得たりしています。そうしたら、やっぱりもっとやってみたいということになって、三原まちづくりセンターのマルシェに参加していきました。もっと楽しみたい、もっとやってみたいという欲求や向上心が生まれ、さらにイベントをやっていききたい、それなら、12月はできなかったけど自分たちでつくってみよう、それが「全人類が楽しめる祭りイエイ♪」になっていきました。どんどんどんどん自分たちの達成感が向上心につながっていき大きくなっていく、そこでいろいろなことをまたやってさらに気づいていき実行力につながっていくというような、まさに先取りされてしまったというか、新規事業ですけれどももう始まってしまっているというような、そんなふうに私は感じたところでもございました。川本町さんの取組、非常にすばらしいと思っております、今回新規事業で紹介させて頂いておりますが、今後取り組まれるところにつきましても、まさに公民館と地域のPTAでも婦人会さんでも、一緒になって取り組んでもらえればと思っておりますので、よろしくお願いたします。

○大地本委員 ありがとうございます。

○竹田社教主事 そうしましたら、子どもたちの活動のフィードバックを学校に対してどういうふうに行っているかということですが、島根県が作成しているキャリア・パスポートに教育委員会が作成した地域活動参加証をため込んでいくような作業をしています。地域活動参加証は、地域活動に参加した子どもたちがもらえる名刺サイズのカードです。

当初は、毎月の第1月曜日に「あそラボ」のミーティングをしていて、関係者や先生方と集まる機会があり、そこで自分たちの活動に対する自身の振り返りをし、それを地域の方に一回返して、地域の方のフィードバック受けるという循環をつくらうとしましたが、それを毎回毎回やっていこうと思うとお互いかなりしんどくなってしまいました。そこが目的になってしまったら本末転倒だということで、カードにして担任の先生や担当の先生にお渡しして配ってもらうだけにしました。振り返りはしてないということではなくて、必ず地域で活動した際には子どもたちの振り返りを取るようにしています。付箋に感想を書く、次につながる言葉とか気づきだとか、そういったことを書いてため込むようにしています。フェイスブックがございましたが、そこに全て掲載しておりますので、先生方もそのフェイスブックにアクセスしてもらえれば、子どもたちがこんな体験をしてこんな感想を持っているということを見ていただくことができます。見ていただいているかは分かりませんが、そういった取組はしているところです。

あと、年に2回ほどふるさと教育の推進連絡会というのを教育委員会主催で開催しています。その場でも年間を通しての子どもたちの変容ですとか、活動の様子、今後こういうふうになったらいいということ、集まっていた小・中・高校のふるさと教育ですとか地域連携担当の先生、コーディネーター、公民館職員、まちづくりセンター職員と情報を共有して進めているところです。これが現在の状況になります。

○大地本委員 すばらしいなと思いました。ありがとうございます。

○有馬会長 それでは、次をお願いします。ありませんか。

○賀戸委員 すみません。婦人会の賀戸といいます、よろしくをお願いします。素朴な質問ですけれども、大村さんがもともと地域おこし協力隊として島根県の川本町を選ばれた理由は何かあるのでしょうか。

○大村氏 御質問ありがとうございます。自分はもともと神奈川県横浜市の出身で、そこで高校生とか大学生と一緒に地域づくり、まちづくり活動をしていました。ちょうど東日本大震災があったときに被災地に行くことがありまして、まちづくりだけではちょっとやっていけないというか、人が本当に町をつくるためには教育が必要だということから少し教育の方にも興味を持ち出して、教育と人づくりとまちづくり地域づくりというのを同時に進められる事業をつくれなにかということをしごく考えていました。ただ、横浜は地域に子どもが出ていくということがしごく難しく、例えば事件の問題があるとか、安全管理の問題というところはしごく大きな壁になっていて、ここだと難しいと考えていたときに、ふと地域おこし協力隊を調べてみようと思いました。調べたときに、島根県には教育という分野が一つありました。自分は一次産業、二次産業くらいしかないのかと思っていたのですが、教育という分野があって、そこにチェックを入れたら島根県がたくさん出てきました。コーディネーター系の仕事がたくさんあったのですが、川本町が少し違ったのが、そのコーディネーターの配属される場所が役場の中というところでした。他は基本、配属先が高校でした。神奈川県にいたときに高校の先生と一緒にいろいろやってみましたが、高校を間に挟むと動きにくいというところがあったので、町という立場だったらまた違ったアプローチ、可能性があるというところが一つ川本に興味を持ったというところですね。あとは、会おうと思えば全員会えそうな人口の規模っていうところと、その当時、町の総合戦略に、「夢と可能性に挑戦する人材が循環するまちへ！」というスローガンが掲げられていたので、そこが自分にとってはしごくヒットしたというか、自分もそういう町をつくり、残していきたいというようなところがありました。実際に川本町に来て、いろいろな人との体験プログラムがあったのですが、そこで人と関わる中で、この人の距離感ちょっと都会に近いものがあるな、つかず離れずというか、そんなに監視されている感覚もないけれども、でも心配もしてくれそうな距離感っていうところがしごくいいと思って川本町を選んだという感じで、大成功でした。

○賀戸委員 ありがとうございます。本当、人のご縁というのは大切なものだとつくづく思ったところです。本当にいろいろと理想どおりの動きをされていると思います。うちの自治体は規模も全然違います、人口も川本町のほんの数分の1で生徒の数も本当少ない、でも、その中から何か事業で参考にできることがあればちょっと挑戦してみたいと力をもらいました。ありがとうございます。

○有馬会長 ありがとうございます。



○高橋委員 失礼します。松江の城北幼稚園の高橋です。よろしくお願ひします。今日はこの川本「あそラボ」さんの活動を見せていただきました。感想ですけれど、すごくすてきな映像をたくさん見せていただいたと思いました。子どもたちがあんなに生き生き元気に活動するというのにすごく感動しました。見て思ったのは、お兄ちゃんやお姉ちゃんというのは本当に大人よりずっと子どもたちのことを上手に教えて、子どもたちの意見を十分すくい上げて、育てていく一番の力だということにすごく感じました。こんな経験をした子どもたちが将来、高校を卒業したらどこに行くのか分かりませんが、あたたかい自分のふるさとと違ってきっと帰ってくると思ひます。自分のふるさとに帰ってくるといふような、そんな姿を思い描けたといふか、そんな感想を持ちました。今日はいい映像を見せていただきまして、発表も聞かせていただきまして、ありがとうございます。

○有馬会長 藤井委員さん、隠岐から見て今の川本さんの活動どう思われましたか。

○藤井委員 隠岐、西ノ島町から来ました、藤井と申します。発表を聞かせていただきました。ありがとうございます。何となくそういう現場から離れていた自分がちょっと恥ずかしいと思ひつつ、こんなにダイナミックな動きになることが何かわくわくして、本當刺激をいただいた、目が覚めたといふ事例だったと思ひています。

この発表を聞きながら少し思ひたのですが、社会教育施設の在り方とか現状にちょっともやもや感があった1年だったので、もう少しその情報をいただけたらといふふうに思ひています。例えば、地域で編成された公民館がまちづくりセンターと共同して、そこが実はもう公民館がなくなってその職員さんも仕事ができなくなった、まちづくりセンターの一本だけ残ったといふ地域もあります。今年に入ってある地域の方に研修で話をしてほしいといふことで行かせていただきました。まちづくりセンターから公民館が丸ごと移管して3年間研修がない状況の中で、たくさん悩みながらまちづくりセンターの職員さんたちが一生懸命頑張っておられました。社会教育を基盤にした地域づくりをしていくといふのは、島根県が日本の最先端を走っているところだけれども、実際にそういったことを進めていくところがどんな現状にあるのか、皆さんがどんなことを悩んでおられるのかといふのも、今日の発表を聞きながら気になったところではす。

○有馬会長 ありがとうございます。

じゃあ次、浜崎委員さんお願ひします。

○浜崎委員 発表ありがとうございます。純粋に、社会教育はいいなとすごく思ひて聞ひていました。組織がはっきりすればするほどミッションに縛られて動きにくくなるといふのを学校に戻ってすごく感じているので、ザ・社会教育の動きで羨ましいと思ひました。有志でやっておられるのはそのままいいのではないかと思ひて聞ひていましたし、町の方が後ろに2人来ておられるのですが、この肝の据わり方もすばらしいな、いいなと思ひていました。最初に教育長が挨拶をされた話が腑に落ちました。川本の規模だからこそのよさがすごく表れていて、何か安全に活動もできてファジーでも受け入れてもらえる規模

で、みんなが何となく活動がよく分かっていてバックアップもできるという、うまくそれを利用して活動しておられるというのが羨ましく思いました。小学校の校長ですので、その立場からするとこの活動をよく知って逆に利用するように学校もならないといけないと深く深く反省しながら聞いておりました。以上です。ありがとうございました。

○有馬会長 それでは、高尾委員さん、お願いします。

○高尾委員 大変すばらしい活動報告を聞かせていただきました。ありがとうございました。ちょっと質問を1点だけさせていただきたいのですが、先ほど子どもたちの生き生きとした表情とか、大学生の意欲的な活動ということ聞かせていただいておりますが、逆に、この活動を通して子どもとか子育て中のお父さん、お母さん方の、地域に向ける潜在的なニーズが明らかになったようなものはありませんでしょうか。要するに地域に何を求めているとか、こういう点があったらいいというようなことが裏返って行って、その活動の原動力みたいになっている部分もあるのではないかという気がします。その辺りについて何かお感じになったことがあればお聞かせ願いたいと思います。

○大村氏 御質問ありがとうございます。自分が一番感じているのは、やっぱり子どもたちが自由に遊べる遊び場というか、自分たちがいてもいいという、じゃけんにされないような場所が求められていたのではないかという感じがしています。中高生に関しては、やはり学校とか家とか、寮生とかもいたりしますが、そこ以外にも自分を解放できる場所、仲のいい友達と自由に過ごせる空間というところが一つ求められていたのではないかといいところがあります。

小学生とか小さい子たちに関していうと、「あそラボ」の拠点は川本の町なかにあるのですが、なかなか思い切り遊べるような空間というのがありませんでした。でも、そこを空間という解決方法ではなくて、「人との遊び」というところで子どもたちが欲求を発散している感じがします。

遊びが生きる場所、自分を気兼ねなく解放できる場所というのが小学生から中高生にとってはすごく求められていたのではないかという感じがしています。

保護者さんについては、なかなか見えないところではあります。時々不登校ぎみな子とかも来て、でも地域で活動することを通して、それをきっかけに学校にもう一回行けるようになったとか、不登校が解消されたというようなことを言うてくださる保護者さんがいます。別にそういうケアの場所としては考えていたわけではないのですけれども、取りあえず来た子たちを全部受け止める、受け入れるというスタンスでいたら、そういうケアの必要な子たちも自然とそうなったようです。特に何か技術があるわけではないのですが、多分子どもたち同士の関係性だったり、地域に出ていったときの大人の方の声がけだったりによって、いい形で解消されていったのではないかということをつけ加えておきます。以上になります。

○高尾委員 ありがとうございます。

○有馬会長 ありがとうございます。予定した時間が来ておりますので、そろそろ終わらなければいけないと思います。最後にまとめるよう言われておりますが、皆さんの方からも貴重な意見をいただきましたので、川本の皆さんまたそれを生かして、発表に向けて準備を進めていただけたらと思います。私も映像を見せていただいたり、説明を聞かせていただいたりしながら、きっといい発表ができると非常に大きな期待を持たせていただきました。

基礎的、基本的な話というか一般論的な話にもなるかもしれませんが、やっぱり社会教育というのはいろいろなファクターを持っているという意味で、何もかも発表の中へ盛り込むというわけにいかないところがあって、発表全体の中で何を中心に主張するかということも考えていかなければなりません。川本町さんは何をとり上げてもできるだけの素地を持ってらっしゃいますので、どうまとめて発表するかということが一つはあるかなと少し思いました。活動の映像を見させていただきまして、立派に楽しみつつ子どもたちが活動している様子が伝わってまいりますので、これは既に大きな財産だというふうに思いました。特に、小中高大学、それに大人が少し絡んで、縦につながったというあたりを、一つの売りにしていくということも一つの手だというふうに思います。

どの地区でもそうですが、小・中学校ぐらいまでは地元の子どものを地元で育てることが容易にできるのですが、高校、大学になりますと地元を離れるというのが一般論です。したがって、高校、大学に当たる年齢の子どもたちが、「地域で育てる」ということから離れていくことは社会教育の大きな問題点です。それを川本町は高・大を含めてということにチャレンジしていらっしゃるという点、これは川本の持っている一つの土地の有利さもあるわけです。つまり、島根中央高校が地元にあって、小中高とつながっているという点です。それを生かして高校生や大学生の年齢の子どもを地域でどうするかという課題に挑戦するということが一つの可能性としてあるわけです。たまたま面白いのが、小中学生よりも高校生の方がよそから来た人間が多いという現状があるのではないかと推察しているわけです。そのことをどう我々が捉えて、よそからたくさん来ている高校生を地域でどうやって育てていくか、一緒になって育てていくか、この辺も面白い課題なのです。今あちこちで起こっております外国人も含んだ地域の若い子どもの教育をどう考えるかにつながると思います。その辺が面白さとしてあるし、これからの時代の中での大事なテーマの一つになるわけです。ただ、それを中心にしていくのがいいかどうかはまた別問題です。

今お話ししたのは、子どもをテーマにした分科会ということで、地域で子どもをどう育成していくか、そこに大人がどう絡んでいくかという問題です。活動をする側の子どもの視点で今お話ししているわけですが、実はその子どもたちをどう育てていくかという事業主体自体の問題があるわけです。それが今、委員さんの方からも出てきたと思うのですが、事業を推進する主体がどこにあるか、地域によっては公民館やコミセンが中心になってい

るというのもあるかもしれません。この島根の社会教育のテーマが地域づくりにおける地域のつながりづくりというテーマが入っておりますし、事業主催する県のお金もその点を念頭に置いて、公民館が強力な力でやっていきさえすればいいというふうな問題ではなくて、やっぱり地域ぐるみという言葉が当てはまると思いますけれども、そういう視点で子どもを育てていくと、学校と地域、学校といっても高校も巻き込んでというふうになってくるわけです。そういう事業主体、推進する主体の問題があります。どちらかというところと今日、映像で見た範囲では事業の主体者は誰なのか、動かしているのは誰なのか、背後でコントロールしているのは何なのかというあたりがちょっと見えにくいところがあったわけです。その辺を発表としてどう説明していくか、分かりやすく見える化していくかというあたりも問題かというふうに思いました。つまり、島根がテーマにしておりますつながりづくりという点でそれが見えるようにしていくということが大事なのではないかと思います。

これは、実質進めている側の支援者の厚みとか広がりとかに関わってくると思っております。島根の特質として、島根はいい人が多いわけですから、温かく遠くから見守ってくださる人がいて、子どもたちをずっと温かく見て応援してくださっています。このことはよく分かるのですが、非常に曖昧さも伴っていて、見えないところもあるわけです。そういうこともつながりづくりの中に大事な要素として入ってくるわけですが、それをどう説明して分かってもらうか。それが川本町の一つの特質としてどう見せていくかというあたりも大事なことになるのではないかなと思います。

私は個人的に川本町といったときに、堤防という言葉がちらっと聞こえて、あれも川本町らしさだなと思いました。江の川があって自然があって、いろいろな人が暮らしていて、実社会的な人間社会というものも見えないといけないけれども、やはり地域柄という中における自然の川本町らしさみたいな部分も子どもが育っていく上でどう巻き込まれているとか、その辺も少し見るといいと欲張って思ったりもしました。これは考えようによって欲張り過ぎると内容が分散してしまいますので、これぐらいで終わりにしたいと思います。

最後にしますが、補助金をもらってやるという場合の最大の問題点は、金の切れ目が縁の切れ目になって、活動が3年たったらストップしてしまうといったことがあります。それがないように1年目、2年目、3年目にどういう積み上げをしながら地域に根づいていく活動として育てていくかという観点が大変ではないかと思います。もう30年ずっとやってきたということさらにもう少しこうしようと思ってやる研究発表とは違って、新しく「つながりづくり」という点を目指しているという点で、そんなことを思いました。

この間、広島で全国大会がありましたときに、石見の吉賀町が発表されました。活動している代表の中学生が出てきたり、高校生も連れてきていたりして、発表の見せ方に立体的な工夫というのがあるかと思いました。それはなぜかというところ、今頃、全国大会も

中国大会も、プレゼンをして終わりといった形が結構多いのです。そこへ生の人間、中心人物が出てきたり、映像でつながってその場で顔を出してしゃべっている人が出てきたりすると随分違ってくるということを私は経験的に思っていたものですから、ヒントになるかどうか分かりませんがお伝えしたところです。

今日は川本町の方から遠方おいでいただき発表いただきまして、私たちもいい勉強をさせていただきました。ありがとうございます。大変かもしれませんけれども、楽しんでまた発表に向かって御努力いただけたらと思います。ありがとうございます。

川本の方の事例発表で勉強させていただいたということで、私の司会もこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

○藤原GL 有馬会長、ありがとうございます。

その他事項としまして、委員の豊田様より情報提供があるということですので、よろしくお願いたします。

○豊田委員 すみません、少しお時間をいただきます。社会教育主事講習を島根大学でやらせていただいていることもあり、事前に人づくり、つながりづくり、地域づくりと社会教育の関係性みたいなところについて考えていたのですが、あまり何かその情報提供というよりは、改めてちょっと感じていることをお伝えできたらと思っています。

本当は川本の方も見ていただけるといいと思ったのですが、改めまして、3つのキーワード、人づくり、つながりづくり、地域づくりを考える前に、リンゴの木の絵に書いてあるように、人口減少に打ち勝つみたいなところをしっかりと意識することが大事だということを、今日川本の事例を見ながら改めて思いました。そうしたときに2点ありまして、1つは「私たち」をどう捉えるのかとか、「私たち」というのをどう拡大していくのかということがやはり大事です。今日、冒頭、教育長から少子化ではなくて子どもたちの過疎化みたいな言葉もありましたけど、人が流れ出ていくという流れに逆らえない中で、「私たち」をどう拡大するか。つまり、今日、最後に竹田先生からもありましたけれども、関係人口とか、その地域に住んでいない人たちをどう「私たち」として捉え直すかというような、そういうつながりをつくっていくということも大事なのではないかと思いました。また、以前の社会教育委員の会でもお話ししたかもしれませんが、ふるさと教育と絡めて、戻ってくるシャケをどう育てるのかというよりは、改めてシャケが戻りたい川をどうつくっていくのか、シャケが戻ってくる川ってどんな川なのかという問いに対して、大人がしっかりと向き合っていくことが大事だということを感じています。そうしたときに、竹田先生も、「還流」という言葉を使われていましたけど、今いろいろな社会教育の取組をしているときに、その地域から出て行った子どもたちとどう関わり続けるかということが極めて大事になってくると思っています。今日発表にもありましたように、特に大村さんの発表にありましたように、上と下の世代をつなげていくような話もありましたが、出ていった子たちと今いる子をどうつなげていくか、そこを社会教育としてもどんどん取り

入れて、関わりやつながりをつくっていく仕掛けがあるといいと思いました。うちの島でも還流といったキーワードでいろいろやらせてもらっていますが、還流という人が戻ってくる、ぐるぐる回るといったことを考えるときに極めて大事なものは、狙い過ぎないということだと思っています。先ほどの戻ってくる川というのはどんな川なのかというと、子どもたちが帰ってきたい、もしくは今日の大村さんみたいに島根生まれのシャケではないけど、ふらふらと迷い込んでくるシャケをも取り込むような、そういう地域ってどういう地域なのかみたいなことを考えていくということが大事だと思いました。

そうしたときに、本当に大事なことはどんどん試行していくことだと思っています。どんどんお試しでやっていくことだと思っています、今日もやっぱり大村さんの取組とか位置づけが結構分かりにくかったと思いますし、曖昧だったと思いますが、これが実は極めて大事なことで、まさに境界線を溶かすとか、どこに所属しているか分からないみたいなことが、管理する側からすると非常に難しい話ですけれど、そういう存在をちゃんと許容している役場の方、そこをしっかりとサポートされている先生、竹田先生みたいな存在がすごく大事だということを改めて思いました。新しい価値を生み出していく人たちに調査したときに、新しい価値を生み出していく人たちの共通点は、隣に「いいじゃんいいじゃんおじさん」がいるということでした。「そのアイデア、いいじゃん。」「困っていることがあったらつなぐよ。」というような、そういう存在が例えば役場の課長さんだったり、竹田先生だったりではないかと思っていて、そういう人たちをこの社会教育分野でもたくさんつくっていくということが大事だと思いました。

もっと言いますと、若い子たちにどんどん担い手になってほしいのだったら、あわせてトラックを空けるというか、そういう若い子が走れるトラックを、まあ自分も含めてこれは自戒の念も込めて言いますが、長くおじさんたちが走り続けられないという、トラックを空けてあげて新しいチャレンジの場所を、席をちゃんと用意してあげるということが大事だと思いました。

今日は川本の事例を伺って、子どもたちだけではなくてそこに関わっている大学生とか、大人が学ぶ、共学していくというような、今まさに学校教育で、先生が子どもたちに教えるだけじゃなく、先生たちも学んでいくというような、学びの在り方が変わっていているところを、もっともっと社会教育にも入れていく、アップデートしていくということが大事だと思いました。少し時間を取っていただきましたけれども、お伝えしたかったことは以上です。今日はありがとうございました。

○藤原GL ありがとうございました。

事務局からは以上でございます。全体を通しまして、皆様の方から何かございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

そういたしますと、最後に、石原副教育長の方からお礼を申し上げます。

○石原副教育長 副教育長石原でございます。有馬会長様、高尾副会長様はじめ、社会教

育委員の皆様、そして川本町の皆様、どうもありがとうございました。今日、本当に様々な御意見をいただきましたし、川本町様の事例を通して、いろいろ私たちも気づかせていただくことがたくさんございましたし、まずやはり地域づくりと社会教育というものがどれだけ密接であり一体的に進めていかなくてはいけないかということに改めて考えさせていただくことができました。これまでの委員の会議の中でも、横串というものについての御意見等ございましたけれども、施策の横串と併せて世代間といいますか、小中高とその他の世代間での縦のつながりというものを、いかに社会教育の中で育てていく必要があるのかということも、今日改めていろいろな御意見をお伺いして感じたところでございます。今後の施策の方もどういった形を進めていったらいいのか、まず川本町さんの例を実践例として他の地域に広がるようなことも私どもとしては取り組んでいきたいと思っております。また今後とも様々な御意見、御提言等、頂戴できたらと思っておりますので、今後ともお力添えいただきますようにどうぞよろしくお願ひいたします。本日はどうもありがとうございました。

○藤原GL 本日の議事録につきましては、後日発言の骨子の御確認をお願いいたしますので、その際には改めまして御協力のほどよろしくお願ひいたします。

以上をもちまして、令和4年度第2回島根県社会教育委員の会議を終了いたします。ありがとうございました。お気をつけてお帰りください。